

第16回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

大分県立日出総合高等学校 衛藤 準 教諭

参加数 : 9回 (第10回まで大分県立情報科学高等学校、第13回は大分県立日出陽谷高等学校で参加)

受賞履歴 : 最優秀賞 第7回、第10回 / 部門賞 第9回 (※第16回以前の受賞履歴を掲載しています)

受賞コメント

STOCKリーグ参加の経緯

商業教育の研修会での紹介をきっかけに、第5回大会に3年生課題研究（総合的な学習の時間）の中で初参加しました。金融経済分野に興味・関心のある生徒たちと、基本的な知識や技術だけでなく、1年間かけた探求的学習をより深め、行動的に学ぶことのできる教材を探し続けていた時期でした。その目的に最適な教育プログラムだと感じたので、迷わず取り組んでみました。生徒の興味・関心や意欲を高め、基本的知識・技術を身につけることはもちろん、グループ・ワークやプレゼンテーション等を通じてコミュニケーション能力を高めること。また、身近な課題を発見し、問題解決に向けた学習を継続する中で、実社会をより身近なものとし、学ぶことの楽しさを実感させたいというのが、主なねらいでした。STOCKリーグに参加する以前は、インターネットがない時代から、新聞やテレビから、株式や為替相場、政治・経済ニュース等を一定期間記録したり、自分の考えを発表させたりしていました。また、修学旅行の行程に新たに東京証券取引所見学を入れて、ただく等、学校での学びが、より生きた社会へつながるよう取り組んで参りました。

STOCKリーグの取り組みについて

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

目標に対する生徒観・教材観・指導観がぶれないこと、「初心」に最も留意しています。私の場合、校種や学科・科目、指導時間や生徒数等が、年度によってかなり変化がある環境です。それらにいかにアジャストできるか。そのマッチングを試行錯誤しながら、時間を大切にするよう心がけています。経験値や環境は変わっても、生徒たちはいつも初めてでした。ほぼ共通する生徒の変容として、金融経済教育への基本的な知識・技術の獲得以外に、①実社会との距離感 ②主体的な学び ③コミュニケーション能力 ④継続性(探求力)4点の向上を挙げます。そして、レポート提出を終えた生徒たちの何ともいえない達成感も大きな魅力です。振り返ると、地元の企業や遊園地、時には、東京の上場企業や大学の先端研究センター等へ生徒と行ったフィールドワーク。取り組みを経て、上場企業への就職や経済系学部への大学進学。また、世界を舞台に活躍をめざす道を歩みはじめた生徒たちとの出会い。また、最優秀賞をいただき、研修させていただいたニューヨークでの金融経済教育への衝撃。どれも忘れ得ぬ、STOCKリーグからいただいた大切な学びの系譜です。

参加を終えて

最もよかったと実感するのは、「教室と世界が繋がっている学び」の感覚を持続できたことです。それを10年以上にわたって生徒と感じられた、STOCKリーグとの出会いに心から感謝したいと思います。あえて、苦労を挙げれば時間との戦いです。アクティブラーニングには、教材開発や準備、指導時間等に多くの時間が必要です。年々、忙しくなる社会環境下で、時間の確保には、日々挑戦し続けております。今回から、レポート形式もフォーマット式に変更となり、今後、参加される先生方や生徒がより参加しやすい改善となったのではないでしょうか。STOCKリーグは、「これから

が本格的はじまり」と確信しています。16年間、中・高・大学生が同じ土俵でしのぎを削りながら成長してきた、希有な教育資産をよりグローバルに発信され、サステナブルな社会構築やダイバーシティの伸展等、地球規模で生きる力や生き抜く力を培うことに、更に大きく貢献していって欲しいと願います。私も微力ながら、「未来を切り拓く教育」を使命として、本受賞を胸に、新たな研鑽と精進を重ねて参る所存です。

末筆ながら、大会関係者はじめ、本教育実践にあたりご理解とご協力、並びにご支援を賜りました全ての皆様方、そして共に学んだすばらしい生徒たちに、この場をお借り致しまして、心から感謝と御礼を申し上げます。

第16回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

静岡県立榛原高等学校 向井 稔 教諭

参加数 : 中学部門 3回 / 高校部門 7回 (第6~10回 静岡県立浜松西高等学校で参加)

受賞履歴 : 敢闘賞 : 第6回、第10回、第16回

(※中学・高校両部門での受賞履歴。第16回以前の受賞履歴を掲載しています)

受賞コメント

STOCKリーグ参加の経緯

STOCKリーグへの参加は、以前勤務していた浜松西高校の「総合的な学習の時間」の中で、課題探究学習を担当したことがきっかけでした。現在の社会・経済に关心を持ち、将来、大学で経済学や経営学を学ぶことを希望する生徒に対して、より実践的な学習ができるであろうと考え STOCKリーグへの参加を決めました。その後、この取り組みは、隔週土曜日に企画された自由参加の教養講座に移行し、キャリア教育（職業観の育成）の一つとして同校に併設されている中等部3年生と高校1年生を対象に公民や現代社会の授業と連携して STOCKリーグに参加させていただきました。現在の勤務校である榛原高校に移ってからは、高校3年生の授業が中心となってしまったため、受験勉強と重複してしまい、参加するのが困難になってしましましたが、本年度は、1年生の現代社会の授業を担当することになり、久しぶりに本格的に参加させていただきました。

当初の目的は、経済の学習に加えキャリア教育として企業分析を行うことでしたが、榛原高校では、地域経済の活性化を主テーマに加えて実践しています。その理由は、地域の進学校である本校の役

割の一つに、将来この地域のリーダーとなる人材を育成する必要があると考えたからです。このように、ねらいを少しずつ修正しながら参加をさせていただいています。

「現代社会」や「政治・経済」、「公民」の授業で学んだことは、本来は実社会とのつながりが深いはずですが、生徒たちはその接点に気がつかないことが多いように感じています。その点、STOCKリーグを通じた学習は、バーチャル株式体験やレポートの作成を通じて、授業で学んだことが実際の経済と深く関わっていることを感じることができる貴重な体験だと思います。また、私たちの学習成果を、経済（金融）の専門家が評価し、入賞グループに対して講評を頂けることも、生徒たちにとって素晴らしい経験となっていると感じています。

STOCKリーグの取り組みについて

生徒を指導する際には、生徒主体の学習となるように留意しています。STOCKリーグには、絶対に正しい解は存在せず、また、答えは一つではありません。このような課題に対して、生徒たちは、授業で学んだ知識を活用し、各自の意見を持ち寄り、グループで議論を進めながら学習を進めて行きます。もちろん、うまくレポートがまとめられなくて悩んだり、意見が対立してトラブルが起きることもありますが、最後まで粘り強く学習に取り組み、得られた達成感は生徒を大きく成長させるとだと思います。加えて、生徒の学びの中から、指導者である私もたくさんのことを学ぶことができ、教師と生徒が共に学び合う関係をつくることもできていると思います。

また、企業訪問などフィールドワークなどを行い、実社会とのつながりを持つことも大切な学習の一つであると感じています。先日訪問させていただいた企業では、生徒の取り組みの姿勢を高く評

価していただき、予定していた時間を大幅に延長し、熱心に御説明いただきました。このような経験は、生徒たちを刺激し、さらに深い学習につながっていくのではないかと考えています。

参加を終えて

本年度、初めての取り組みとして、1年生の授業(「現代社会」)のなかで、STOCKリーグにチャレンジしました。地元企業へのフィールドワークや出前授業などの特別講義を取り入れ、参加した生徒たちは、より多くのものを得ることができたと思います。また、私自身も授業改善のヒントをたくさんいただきました。一方で、限られた授業時間の中では十分な学習時間を確保できませんでした。生徒たちは、放課後や冬休みに自分たちの時間を使って頑張ってくれました。結果、参加17チーム(82名)がリタイヤすることなく、無事1年間の学習を終えることができ本当によかったです。

毎回、生徒たちのそれぞれのレポートを読むのは指導者として大変うれしいものです。しかし、締め切り間近となると、少しでも良いものをつくりたいという生徒の思いから、時間との戦いとなることが多くこの点では苦労させられています。

私は、STOCKリーグの取り組みとは、これから社会を生きていく生徒たちに身につけて欲しい力を育むために大変重要な学習プログラムだと考えています。なぜなら、STOCKリーグのレポートをまとめるためには、自分たちが立てたテーマに対してチームとして協働しながら、それぞれの持つ知識や思考力・判断力を活用し、それを他者に文章で伝える表現力を必要としているからです。

選挙権年齢が引き下げられ、高校生の一部も投票権を持つことになりました。STOCKリーグで学んだ生徒たちは、どの政治家に投票すれば「私たちを幸福にしてくれるか」や「日本の経済を活性化してくれるか」などの視点で、鋭いスクリーニングを行ってから投票所に足を運んでくれるのではないでしょうか。

最後に、私たちにこのような学習の貴重な機会を与えてくださる日本経済新聞社、野村ホールディングス、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

第16回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

青山学院大学 亀坂 安紀子 教授

参加数 : 13回 (※第5回まで龍谷大学で参加)

受賞履歴 : (入賞) 歴はなし

受賞コメント

STOCKリーグ参加の経緯

私は、大学で証券投資論の講義を担当しておりますので、コンテストのことを知ってすぐに興味を持ちました。証券投資論が専門とはいえ、株式投資の理論と実際の投資の世界について教えるのとでは、大きく異なります。コンテストに参加する前は、授業で理論的なことを教えて、学生からよく“この数式とかを理解したら、本当に実際の株価の動きがわかるの？”といった質問を受けていました。このため、新聞の株式欄を配布して、実際の株式の動きを記録してもらったりして、理論的な学習では学びきれない株価の実際の動きなどにも触れてもらっていました。それでも、理論と実際の市場を関連付けて教えることは難しく感じおりました。

STOCKリーグの取り組みについて

株式相場が上昇基調にあると、まだ学習が十分に進んでいないにもかかわらず、実際に株式を買ったりする学生もでてくることがあるので、株式投資は、あくまで自己責任で、リスクがとれる範囲内でと繰り返し伝えています。ゼミ生の中には、実際に証券会社に就職する人もいるので、あくまでリスクのとれる範囲内であれば、バーチャルではなく実際に投資することも、勉強になるのかな

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

とも思っております。実はここ数年、証券会社に就職するゼミの卒業生が増えています。私のゼミ生の場合、就職活動への投資を兼ねているのかもしれません。

参加を終えて

最も良かったのは、学習意欲が飛躍的に高まったことです。実際の株価変動を見ることから良い刺激を受けて、急速に実際の経済や株価、為替変動等への関心が高まりました。実際の相場変動を理解しようと理論面の学習意欲も高まりました。苦労(指導者としての悩み)は、相場が上昇基調の時は、学習よりも実際の(自己資金による)投資に向かいがちであることです。

なかなか入賞レポートが提出できないなか、このような賞を頂いてしまって大変恐縮です。

最後に、このような学習の機会をご提供下さっている日本経済新聞社、野村グループ、関係者の皆様にあらためて感謝申し上げます。

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

第16回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

東京大学 首藤 昭信 准教授

参加数 : 6回 (※第5~9回 専修大学で参加)

受賞履歴 : 部門賞 第6回 (※第16回以前の受賞履歴を掲載しています)

受賞コメント

STOCKリーグ参加の経緯

日経 STOCKリーグには、前任校の専修大学と東京大学のゼミで参加をしてきました。我々のゼミの専門は会計学で、特に会計情報の意義を実証分析を通じて検証することを目的としています。ゼミは3年次から始まりますが、最初に財務諸表分析の基本書を通じて企業価値評価の基礎を学びます。日経 STOCKリーグは、そのような知識を応用する貴重な機会として、本ゼミの重要なイベントとなっています。会計学というと、資格試験を通じた受け身の勉強のイメージが強いですが、生の財務諸表データを使って自分たちの投資アイデアを具体化する作業は、会計知識をより積極的に利用する勉強機会となっています。

STOCKリーグの取り組みについて

他の先生に日経 STOCKリーグに参加していると言うと、株価をあてるゲームと勘違いされることがあります。確かに設定したポートフォリオのパフォーマンスは重要ですが、我々のゼミが重視しているのは、レポートの作成を通じた論理的な思考とそれを学術的な形でアウトプットするスキルを身に付けることです。また我々のゼミでは、必ず会計数値の実証分析をスクリーニングにいれる

ことを自主的に課しています。そのため、独創的で柔らかいアイデアのテーマが出てこないというのが本ゼミの特徴ですが、理論ベースのしっかりしたレポートは必ず入選しますので、審査委員の先生方はしっかりとレポートを読んで下っていると感じます。それが STOCK リーグに参加している最大の動機です。

参加を終えて

ゼミ生が同窓会で集まると、必ず STOCK リーグの話になります。学生にとっては、学生生活において最も辛くてエキサイティングな体験になっているようです。ゼミ生たちの大きな成長機会になっていることは間違ひありません、と同時に、教員である私も毎年大変貴重な体験をさせて頂いています。このような貴重な機会を与えて頂いた日本経済新聞社、野村グループ、そして事務スタッフの皆様に改めて感謝申し上げます。またこのような素晴らしい賞を頂けたのは、専修大学と東京大学のゼミ生たちのおかげです。素晴らしい学生たちと出会えたことに感謝したいです。

第16回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

法政大学 長谷川 直哉 教授

参加数 : 5回

受賞履歴 : 最優秀賞 第14回 / 審査委員特別賞 第15回 / 敢闘賞 第16回

(※第16回以前の受賞履歴を掲載しています)

受賞コメント

STOCK リーグ参加の経緯

法政大学人間環境学部に着任した2011年度(第12回)から、私の研究会(ゼミ)では日経STOCKリーグに参加しています。研究会では「サステイナビリティ」をキーワードにして、地球環境問題、企業の社会的責任、先進国と途上国の格差問題、地域社会の再生など、現代社会の様々な課題にグローバルかつローカルな視野で向き合っています。

学部ではCSR論、現代企業論、ビジネスヒストリーの講義を担当しており、企業経営や経済政策に関心のある学生が在籍しています。本学部では2年生から研究会入り、卒業までの3年間を過ごします。1年秋学期に研究会の募集を行っていますが、募集要項には日経STOCKリーグでの活動内容を掲示しています。

研究会では2・3年生の混成チームを組織し、チームごとに活動する体制をとっています。春学期は日経STOCKリーグでの活動経験を持つ3年生が主体となって、過去のレポートの読み込みやテーマ設定に必要な社会的・経済的課題について議論していきます。また、学部講義でお招きした企業やシンクタンクの方と意見交換をする場を設けて、学生の問題認識を深めよう努めています。

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

「サステイナビリティ」は非常に難しい概念です。アルバイト以外に就業経験のない学生にとって、講義だけで「サステイナビリティとは何か」「企業と社会の関係性とは何か」を理解することは難しいでしょう。講義で学んだ知識をベースに自ら課題を設定し、その課題に対する最適解を見出す、まさに実践的な教育の場として、STOCKリーグを活用させて頂いています。日経STOCKリーグは、知識を知恵に変える、いわば大学教育におけるOJTともいえるのではないでしょうか。

STOCKリーグの取り組みについて

学生が所属する人間環境学部は、「人間と環境の共生」や「人と人が共生するサステイナブル社会の創造」を学部理念としています。STOCKリーグで最も重要なことはテーマの選定です。学生は自分たちが生きているのはどのような時代なのか、未来を築くために自分たちはどのような役割を果したらいいのかを基本命題と位置づけて、様々な切り口から基本命題の最適解を求める努力をしています。投資の定石からみれば、首を傾げたくなるようなテーマがあるかもしれません。しかし、チームの全員が苦しみながら考え抜いたテーマには、未来社会を築くヒントが隠されているような気がします。テーマが決まらず、時間だけが過ぎていくこともあります。しかし、学生には安易な妥協はしないように助言しています。

ポートフォリオを構築する段階で重視しているのは、アンケートやヒアリングによる一次情報をできるだけ多く集めることです。勿論、開示された情報の分析は欠かせませんが、企業の皆さんと対話することは、学生たちの考える力を大きく成長させる原動力となっています。企業との面談を終えて、感動を抑えきれずに私に電話をかけてくる事も度々ありました。企業の皆さんとの対話を通

じて、学生の論理的思考力やプレゼンテーション力が大きく成長したと思います。企業の皆さんとの出会いは、学生にとって学びの場でもあります。訪問した企業数が多いレポートほど、クオリティーが高いという印象を強く持っています。

参加を終えて

「よい企業とは何か」「よい社会とは何か」、この問いに明確に答えられる学生はどれほどいるでしょうか。大学生は非常に豊富な知識を持っています。その知識を駆使して、「必ず答えのある問い合わせ」に対しては、的確に対応することができます。しかし、実社会の中から課題を見出す能力はどうでしょうか。「答えがあるのかどうか分からぬ問い合わせ」や「解き方が分からぬ問い合わせ」に対して、学生の多くが戸惑いを感じ思考停止に陥ることが少なくありません。未来が求める人材は、社会に潜む課題を見つけ出し、知識やスキルを統合させながら、課題を解決するための新しい知恵を生み出す意欲を持った若者です。

妥協のない学生たちの議論や大いなる刺激を受ける企業との対話から、自ら工夫する力を持つ人材が生み出されると確信しています。「天は自ら助くる者を助く」という言葉は、過去のものではありません。この言葉に込められた気概を持って、一人でも多くの学生が STOCK リーグに参加し、広い世界を体感して欲しいと思います。

最後に、大変貴重な教育の場をご提供下さった日本経済新聞社、野村グループ、関係諸機関、STOCK リーグ事務局の皆様、学生の調査にご協力下さった企業、諸団体の皆様には厚く御礼申し上げます。